

安心・安全教育ツール開発の手がかりを求めて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-10-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 清史 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00006837

安心・安全教育ツール開発の手がかりを求めて

鈴木清史

はじめに

グローバル化の波は、地球上の至るところに押し寄せている。各地で、人びとがそれまで経験したことがないような事象やモノが怒濤のように流入している。

興味深いことに、目新しい、今まで見たことも経験したこともない事象やモノに対して、人びとがとる対応は洋の東西を問わず類似している。それは、まずは「前例」を当てはめるということである。つまり、従来のやり方を、新しい事象やモノに適用していくことが多いのである。

たとえば、パキスタンの農村地区を歩いていると、道ばたや風の吹きだまりが、色とりどりにきらきらと光っている光景を目にすることがある。これはレジ袋やチューイングガムなどのプラスチック系の包装紙が太陽の光を反射させているのである。

村の人びとは、実に無造作にプラスチックの包装紙を捨てていく。それは、かれらが環境保全の意識が低いからそうしているのではない。かれらは普段食しているオレンジやサトウキビの皮を捨てるのと同じような感覚で、プラスチックやナイロンの包装紙を捨てていくのである。自然の恵みの果実や農作物は、放っておいても時間の経過とともに土に戻る。人びとは、この経験を新しく流入してきた化学製品の素材に当てはめているだけなのである。残念なのは、新しい素材の包装紙は分解することなく（あるいは分解するとしても、果実の皮の何倍もの時間がかかる）、風に吹き飛ばされていく。ただ、人びとの目には、オレンジの皮と同じように「姿を消した」と映るのである。

従来から慣れている行動に変化をもたらすためには、新しい事象やモノについて、それなりの知識があればよいということになる。したがって、プラスチック系の包装紙がゴミであるとか、ペットボトルが再利用可能であるという知識が定着し、それに対応する施設や備品（ゴミ箱など）が整えば、人びとの行動が変化するのには容易に想像できる。

たとえば、日本でもかつてはゴミのポイ捨ては日常的風景だった。もちろん今でも無造作なポイ捨てをみることはある。信号待ちしている自動車の運転席ドアが少し開いたと思ったら、たばこの吸い殻が大量に捨てられるというのを目の当たりにすることは珍しくもない。それでも、それがこそこそとした行動になっているのは、人びとに多少の罪悪感がある（はずだ）からだろう。わたしたちの日常生活では、「ポイ捨てはやめましょう」というような意識向上を目指した標語が至る所で目につく。こうしたことが効果をあげているため、吸い殻（それも車内にたまった山のような）を交差点の信号待ちの間に捨てるという行為が堂々としているようには見えないのだろう。行為者は、自分の行為の意味（とがめられるかもしれない）を認識しているだろう。つまり、これは、ポイ捨てが望ましくないと言う知識や経験が、人びとの行動に影響を与えているのである。

知識や経験が生活する上での意識や行動に変化をもたらすということを前提して、筆者は、ある研究会で、発展途上国での環境保全への意識高揚教育ツールの開発の可能性を検討している。これは環境保全の必要性と、その活動が自分たちの生活の安心・安全につながるという知識と意識を住民に定着させるための教育手法と材料の開発を目的としている研究である。現在、対象としている地域は、筆者の友人が暮らすパキスタンイスラム共和国のパンジャブ州の農村である。

2010年の夏、小学生を対象にゴミの分別意識を調べることにした。そしてその準備をしていた矢先にパキスタンでは未曾有の大洪水が発生した。人びとの生活は破壊され、生命の危険に直面した。

筆者が調査を行なう予定であった農村は洪水からは免れていた。しかし、この自然災害のニュースを受けて、ゴミの分別による環境保全を通じた「安心・安全」だけでなく、災害から身を守るための「安心・安全」教育も必要であることは明らかだった。

そこで2010年の夏の調査では、ゴミ分別を通じた環境に関わる問題に加えて、自然災害についての調査も試みることにした。本稿では、この中から災害への安全意識に関わる部分を取り上げる。

調査

今回の調査では、吉川らが考案し、日本損害保険協会が認定している防災教育ツールである「ぼうさいダック」を用いることにした。防災とは、人びとに損失や害をもたらす事象にたいして備えることである。確かに、すべての害（ハザード）を予想し、それに備えるということは不可能である。むしろ損失や損害を最小限に抑える「減災」のほうがより現実的な表現かもしれない。しかし、人間の生活が安全確保を前提として営まれている以上、防災と減災は同じ姿勢で取り組まれていると考えてよいだろう。

防災や減災は事前の備えや対応だけではない。全体としては、「予防・適応・備え・対応・復旧と修復」というサイクルがある。これらは、害が発生する以前、発生中、そして発生後という3段階を示している。

その中で重要な位置を占めるのが、「こと」が発生した際にすぐに対応する、あるいは反応する「一次対応行動」(the first action to take/ the first moce)である(吉川 2005)。つまり、地震が発生した場合、身体を保護する姿勢をとるとか、火事が起こった際には煙を吸い込まないようにして身をかがめて迅速に現場を離れる、というような行動をいう。

適切な対応をするためには、具体的な事象とそれにふさわしい行動という知識および論理的思考が必要である。吉川らは、こうした行動の教育はゲーム形式の教育ツールを利用することで年少期の子どもたちに教えることができるという(吉川 2005:118-119)。その目的で考案されたのが「ぼうさいダック」である(日本損害保険協会)。

この教材は全部で12枚のA4サイズのカードから成る。表に災害（あるいはそれを引き起こすとされている民間伝承）の絵、そして裏側には、それぞれの害に対してふさわしいとされている（一次対応）行動である（図1と2）。



図1 ぼうさいダック（地震と対応行動）

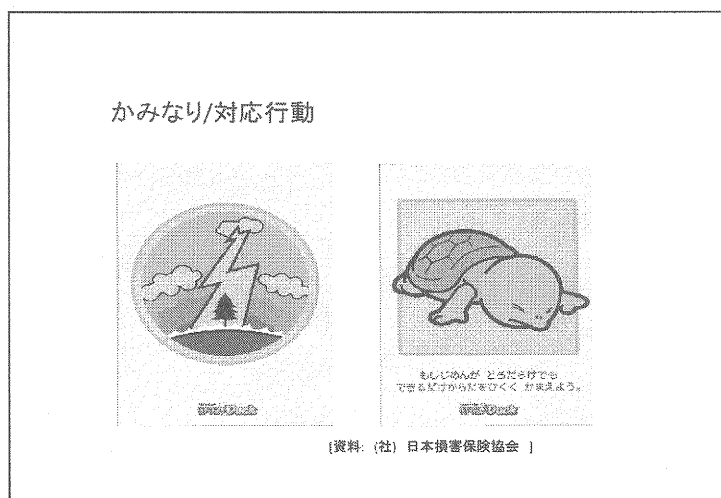


図2 防災ダック（かみなりと対応行動）

援用者注：図1、図2とも、左にハザードそして右に対応行動が描かれている。

このカードは、児童に表面（ハザード）を見せて、それに対応する身体行動を覚えさせることを目的としている（裏面には望ましい行動が描かれている）。身体運動を何度も繰り返すことで、身についた知識を行動へと変えていくのである。知識を行動へ（knowledge to action）ということである。

このカードの教育効果を高めるには、実際に児童に提示し、適切な行動を覚えさせるという練習が望ましい。しかし、今回のパキスタンでの調査では、教室など条件に配慮し印刷物をとおして、ハザードとそれに対する行動を線で結ぶという選択形式のクイズ・ゲームとした。全部で12あるハザードの中から5つを選び、それぞれのハザードの絵にふさわしい対応行動を示した（図3）。

ハザードを5つに限定したのは、日本とパキスタンの文化差を考慮したからである。たとえば、路地から大通りに出るときは左右を見ようという事柄は、日本の都市部では通用しても、この農村では必ずしも当てはまるわけではないからである。また、洪水にしても、日本では長靴で装備するのが普通だが、2010年の大洪水を伝える国際ニュースの映像では、パキスタンの人びとがサンダルや裸足で避難していたりした。こうした事情から今回は項目を選ぶことにした。

今回の調査の目的は、ハザードに備えた（第1次）行動を習得させることではない。むしろ教育ツールを開発するとすれば、どのような情報を組み入れることがのぞましいのかを調べるための予備調査であった。同時に、日本での防災教育ツールがどの程度理解してもらえるのかを確かめるのが目的であった。

調査地

今回訪問したのは、パキスタンイスラム共和国北東部に位置し、インドと隣接するパンジャブ州のU村である。州都ラホールからカラチにつながる国道を300キロメートル弱南西に下ったところにあるヴェハリ県ブレワラ郡にある。

パキスタンの地方行政単位は、州の下に県があり、1つの県には3～4つの郡(Tehsil)がある。この郡は、地方行政の最小単位となる地区（Union Council：以下UC）からなる。そして、UCは普通10くらいの村(village)で構成されている。なお、郡内のUCの数は地域ごとに差がある。その中でも、今夏は85地区を訪れた。

1998年の国勢調査によると、この地区の総人口は1万9677人（男性1万203人、女性9474人）である。このうち、選挙権がある数は1万922人で、人口の半数が成人である。総世帯数は2877であるから、1世帯の平均構成人数は6.8人である。

地区の人びとの職業は、農業が主体である。給与所得者の場合、政府・自治体関係であり、自営業の場合商業が中心である。熟練工は、自動車整備を含む生活関連機器の整備士などである。

女学校にて

調査に協力してくれたのは、ブレワラの町の女学校であった。この学校は、筆者の友人の祖父で、パキスタンの共和国国会議員だった人物が1956年に開設した。もともとは、地域の有力者だった、この人物が私財を投じて開設した施設である。現在は公立の扱いとなっている（ちなみに、友人の祖父は1935年に男子校を近隣に開設している）。

この学校は小学校と中学校の合同学校である。日本の教育制度にあてはめると、小学校1年から高校1年に相当する学年の生徒を対象に授業をしている。生徒たちは、この学校周辺の2つの村に住む。

筆者が訪問したのは2010年9月27日であった。校門は嚴重に警備されていた。村の住民はほぼ相互に顔見知りであるため、部外者の訪問、特に外国人で男性の訪問というは珍しいものだった。

学校の代表者である校長を筆頭に教員は全部女性である。最初の挨拶のときにも教員との握手は控えるようにと通訳者に助言された。

ゲームを実施させてもらったのは、小学校3年から5年までの合同クラスであった。内訳は3年生16人、4年生と5年生があわせて11名で、全員が女生徒であった。



図3 女学校の教室棟(筆者撮影:2010年9月)

「ぼうさいダック」印刷版

生徒全員には図4の「ぼうさいダック」を印刷した用紙を配布した。筆者が英語で説明し、それを通訳者がパンジャブ語に訳した。質問は用紙の上部に配した5つのハザードとそれぞれのふさわしい行動を線で結ぶ、というものである。

Choose the appropriate action in each disaster.
Connect Two Pictures by the line.

Disasters

storm earthquake kidnapping thunder fire

Shout for help Protect your head Keep your body down

Be aware of sounds Avoid smoke

Actions

ハザード 左から
洪水、地震、誘拐、
カミナリ、火事

対応行動（ハザード）
上段左上から：
叫ぶ（誘拐）、
頭を保護する（地震）、
身体を低く（カミナリ）
下段左から：
情報を聴く（台風）、
煙を避ける（火事）

図4 「ぼうさいダック」印刷版
【出典: (社)日本損害保険協会 改編】

わずか5つの絵と対応行動であるが、かかった時間は15分を優に超えた。このゲームは生徒たちを惑わせたようである。結論から言えば、描かれている絵の理解に時間がかかったのである。

まず、地震がその例である。日本では、地震の源はナマズだという民間伝承がある。しかし、パキスタンでは、ナマズと地震とは結びつかない。カミナリ(稲妻)については、日本では低い姿勢を保ち落雷を避けるようにと教えられている。ところが、この身体行動はパキスタンでは理解されなかった。むしろ、カミナリが鳴ったら、その轟き音を避けるための耳をふさぐという。生徒たちの多くはウサギを選んだ。確かに見方によって、このウサギは耳を押さえているようにも見える。

また、村落共同体であるため、集落の住民は顔見知りで誘拐という事件は起こりにくい。そのため誘拐という言葉そのものが理解しにくい用語だったようだ。また、火事も煉瓦作りの家屋が多い地域であるため、発生が少ないため、なじみがなかったようである。

最後に嵐(台風)が残った。日本では「(気象)情報をよく聴こう」というウサギを正解とするのだが、これは「カミナリ」への対応行動としてすでに選ばれてしまっている。生徒たちは何を選べばよいのか迷ったようであった。それでも、何度も質問をして、自力で答えようとしていた。全体としては、低学年ほど、このゲームを楽しむ傾向にあった。

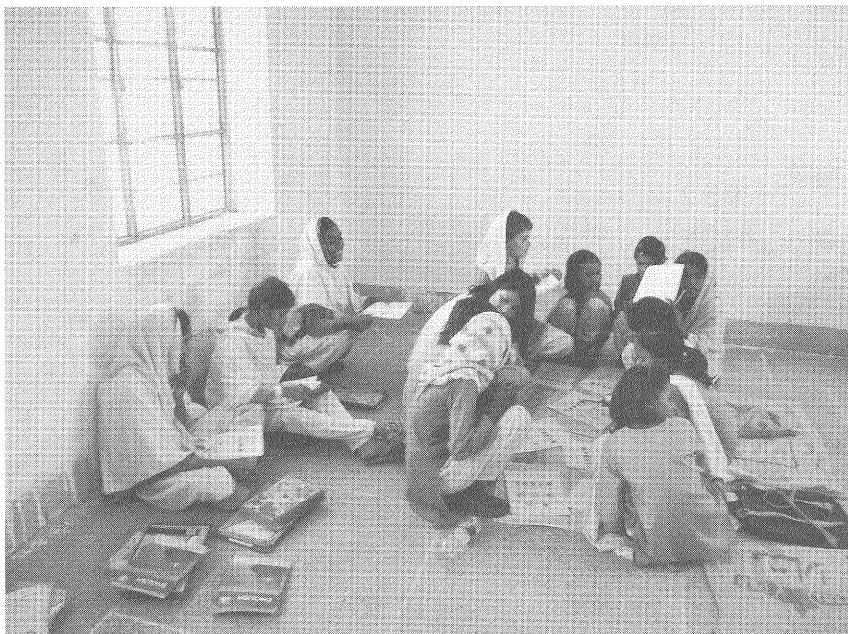


図5 4年生と「ぼうさいダック」印刷版回答中の1コマ(筆者撮影:2010年9月)
生徒たちは床に座って学ぶ。「ぼうさいダック」の印刷した用紙が中央に見える。

まとめ

ハザードと第一次行動に関する今回の試みは予備的調査であった。そのため、日本で普及しているゲーム式の教育ツールをそのまま持ち込んだ。運用は日本国内では身体運動を通して学ぶという方法が普通である。しかし、今回は印刷した用紙を配布し、クイズ形式のゲームとした。その結果はすでに述べたとおりである。日本とパキスタンの文化差、生活様式差がはっきりと表れている。しかし、同時に明らかなこともあった。

1つはクイズ式の学習が生徒の関心を集めたということである。具体的な事物を示すことで、生徒たちは論理的な思考を試みた。そして、当たり前のように、ハザードに対して、それなりの防御行動があることを悟っている（おそらくは本能的にというほうがいいかもしれない）。このことは、地域の文化や生活様式に密着した素材を用いて教材を作ることによって、より高い効果を期待できることを示唆している。そして、今回はハザードを事例にしたが、例えば環境保全をめぐる知識の普及にも拡張できる可能性を示しているということが想像できる。今後の調査活動にとって、意義のある成果だといえそうである。

ところで、州都ラホールに戻ってから、友人の家族にパンジャブ地域ではカミナリに対してどのように行動するのかと尋ねた。友人の妻は、少々あきれたような表情を見せて、即座に言った。「そんな危ない時には外に出ず、屋内から出ない。身を守るのはこれが一番よ」。文化差・生活様式差が存在しない、国際的に通用する、至極当たり前の安心・安全のための対応行動の指摘だった。

謝辞

本研究の一部は、平成 22 年年度～平成 24 年度科学研究費補助金(基盤研究 (C))、[課題番号:22520819]「発展途上国における住民主体の環境安全教育プログラムの開発と評価」(研究代表者:鈴木清史)によって行われた。研究助成に対してお礼を申し上げる。

参考文献

吉川肇子 2005

「防災教育におけるゲームの活用」吉川肇子・矢守克也・杉浦淳吉 (202009)

『クロスロード・ネクストー続: ゲームで学ぶリスク・コミュニケーション』ナカニシヤ出版 第3部 (95-130頁)

(社)日本損害保険協会 「ぼうさいダック」

Ch.Usman Ali 2008

Situation Analysis of Union Council No.85, World Life Organization